わからせ製作委員会
俺をいじめたあの女を
犬のチンポで"わからせ"
犬姦わからせ
基本CG数:38
総CG枚数:433

俺の2年目の学園生活は最悪な状態からはじまった。

平伏　由佳(ひらふせ　ゆか)

この女にいじめのターゲットにされてしまったのだ。
なぜいじめられ始めたのか…もうその原因は覚えていない。

たしか、
「顔がムカつく」
そんな程度のものだった気がする。

だが、いじめの内容は酷いものだった。
最初は意味なく暴力を振るわれたり、パシリにされたりする程度だったが、行為はどんどんエスカレートしていく。

抵抗しようにも彼女を強姦しようとした嘘の証拠画像をでっち上げられ、逆らえばそれを警察に持ち込むと言われた。

しかも、友人達にその画像を送り、一つを消させても他の画像で脅せるようにする周到っぷり。
こうして俺が従順になったと思った彼女の行為はもっと過激になっていく。

「犬飼ってるんでしょ。　飼い犬とお揃いで犬みたいに扱ってあげるw」
そう言うと、服を隠され、裸のまま犬のマネをさせられた。
またある時は弁当を地面にぶちまけられ、四つん這いで食べることを強要された。
挙げ句の果てには、
「犬なのに尻尾ないの、おっかしいよねぇw」
と尻に箒を刺され、女子がいる前で片足をあげ放尿をさせられたりもした。
だが、そんな行為は…今となってはどうでもいい。
彼女はやっちゃいけない事をした。

そんないじめの日々…俺は愛犬のジンと散歩するのが唯一の幸せだった。
ジンは俺が小さい頃から家にいる犬で、もうかなりの老犬だが俺の掛け替えのない家族だった。

そのジンを…あいつは殺した。

倒れて動かないジン。
見慣れない餌。
走り去る人影。

頭の中がぐちゃぐちゃになり、俺はジンの亡骸の前で崩れ落ち

「ああ‼』

声にならない叫び声を上げていた。

そして今、俺はここにいる。

犬月神社。

俺の家の裏手にある、古い神社だ。
何か神頼みをしにきたわけではない。
ただ、俺の決意を報告に来た。

ジンの亡骸をそっと地面に置き、静かに手を合わせる。

「犬神様。　俺はあの女…平伏　由佳を許せません。」

「俺はアイツをジンと同じ目にあわせます。その後は俺もジンの元にいきます。ジンがひとりで寂しくないように。」

「どうか見届けて下さい。お願いします」
絞り出すようにそう告げると、神社に向かって手を合わせた。

絶対に…許さない。

あの女への憎しみで噛み締めた唇から血が滲む。

その時だった。

神社から眩い光が溢れたかと思うと、その光が俺を包み込んだ。

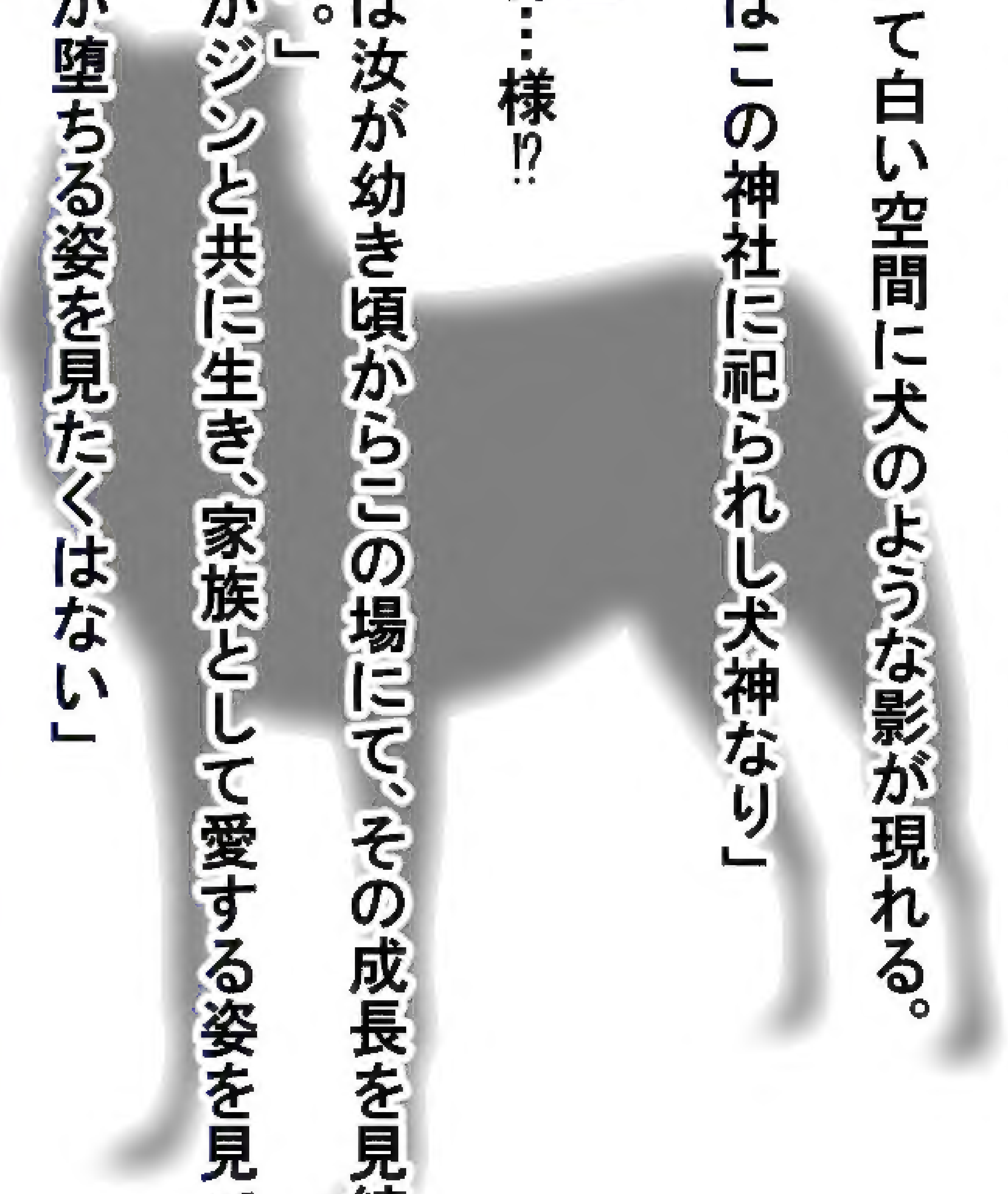
何も見えない真っ白な世界。

「そんな者のために、お前はもうこれ以上失う必要はない」

その空間に聞いたことのない声が響く。

だが、不思議と恐怖は感じない。

やがて白い空間に犬のような影が現れる。



「我はこの神社に祀られし犬神なり」

「‼」

犬神…様⁉

「我は汝が幼き頃からこの場にて、その成長を見続けてきた。」

「汝がジンと共に生き、家族として愛する姿を見てきた。」

「汝が堕ちる姿を見たくはない」

「ですが…犬神様、俺はあの女を許せません。ジンの命を奪ったあの女を、どうしても…どうやっても許せないのです！」

「…ならば我の力をジンに分け与え、この世に呼び戻そう。」

「さらに…汝にはあの女に罰を与える力を授けよう」

犬神様の影がそう告げると、眩い光はだんだんと薄くなり、気がつけば辺りの景色は俺のよく知る犬月神社に戻っていた。

夢…じゃないよな？
あまりの非現実的な現象に俺はぽかんとしていた。
そんな俺の足をざらついた舌が舐める。
この感触…まさか！
そこにはさっきまで冷たくなっていたジンが俺の顔を心配そうに見つめていた。
夢ではなかった。
ジンは犬神様の力で蘇った。
そして俺にも…人智を超えた力が宿っていたのだった。

「ひっ……！　何でその犬、生きてんのっ⁉」
放課後の教室。現れた俺とジンを見て叫ぶ平伏。
語るに落ちるとはこのことだ。
分かってはいたが、やはりジンを一度殺したのはこの女だった。
恐怖に引きつった目でジンを見ていた由佳だったが、格下認定している俺がいることで少し平常心を取り戻す。

「は…はあ、なるほどね。　あんた、今日休んでると思ったら死んだ犬の代わり…買いに行ってたんだ。」
「みんなに犬好きキャラ扱いされてたけど、飼い犬に全然愛情とかないんだねｗｗ」
その犬に手をかけた奴に、一番言われたくないセリフだな。
これ以上、無駄に話をさせることもないだろう。

俺は犬神の力を使うため、両手で素早く印を切る。
「なにそれｗｗニンポー？ｗｗめっちゃウケるんだけどｗｗ」
「うるさい。　黙れ」

犬神之力 壹

探

「!?」

突然体の自由を奪われ困惑する由佳。助けを呼ぼうにも、声を出せず口をぱくぱくさせている。

そんな彼女に近づき、告げる。

「お前はジンを殺そうとした。　ジンは一命を取り留めたが、俺はお前を許さない。」

「俺はお前を懲らしめるために犬神様から力を授かった。」

「どうだ？　動けないだろう。　このままお前を切り刻むこともできるんだぞ」

ただならぬ俺の様子を感じ、本気だと悟ったのだろう。抵抗する気配は消え、何か言いたげな目でこちらを見てくる。

俺は『操』の力を弱め、彼女に言葉を促す。

「声は出せるようにしてやった。　何か言いたいことがあるか？」

「…な、何でもするから許して…」
蚊の鳴くような声で由佳は、こう呟いた。

そう。彼女からでた言葉は、謝罪ではなかったのだ。
ここまでのことをしておいて、謝るより先に許しを求めるなんて。

やはり少し痛い目に合わさないといけないようだ。

「なら…パイズリでもしてもらうか」

俺からの下卑た提案。
だが、それが逆に彼女を安心させたようだ。
所詮、年頃の男が要求することなど、その程度と思ったのだろう。

だが…。

「ただし、するのはジンにだ」
「！」
目を見開いて驚愕する由佳。

「そんなっ！　い…犬に胸で⁉　そんなの絶対イヤ！」
「今、何でもするって言ったよね？」
「…言ったけど！　そんなの嫌！　絶対イヤ！」
「自発的にするのが駄目なら、君の体を操って無理やりにでもしてもらおう。まずは着ているものを全部脱げ」
「やっ…身体が…勝手に…っ」

『操』の力に抗えず、いつも授業を受けている教室で全裸になる由佳。
まろび出た豊満な胸を見ながら、生まれたままの姿を晒している彼女をスマホで撮影しながら言葉を投げかける。
「無駄にでかい乳だな。」
「いっ……見るなぁ！　見るな！　死ね！」
この状態でもまだそんな事を言う余裕があるのか。なら容赦する必要はない。
「さあ、そこに跪いてジンのチンポをしごけ」
「……いやっ……やあっ……！」
俺の指定した、教室の後ろの机の無い場所に座り込む由佳。

「ひっ！」
そんな彼女の前に、仰向けになったジンのちんぽが突き出される。
人のものとは違う、グロテスクな犬ちんぽ。
だが体の自由を奪われた彼女は、それから目を離すことができない。
「ひいぃっ！　犬にパイズリさせるなんて…気持ち悪い…っ！　頭おかしいんじゃないの！　キモ男！　人間のクズ！」
俺に罵倒の言葉を浴びせながらも、彼女の体は徐々に徐々に…ジンのちんぽに近づいていく。
「ひっ…ひいっ…やめてぇ…」

胸にちんぽが触れる。
「やだっ…やっ…だ…んんっ…」
「そのままパイズリしろ」
ぎゅむっ…ぎゅむっ…
「ひぃっ…」
俺に操られ、犬チンポをバカでかい胸でパイズリし始める由佳。
彼女の胸から、にゅぷにゅぷと赤黒い肉棒がはみ出してくる。

「いやぁ…くさぁ…気持ち悪ぅ…」
文句を言いながらも、由佳は胸で小気味よくジンのちんぽをしごき上げる。
ぎゅむりっ…ぎゅむりっ…
ジンも気持ちよさそうだ。

「よし。じゃあそのまま、チンポを咥えてフェラしてあげてくれよ」
「ひいっ！　ヤダヤダヤダ！　そんなこと…んっ…んぐっ…ん～っ！」
乳でしごかれ、先走り液が溢れた犬ちんぽに由佳の唇があたる。
「ひっ…い…やぁ…んっ…」
添えるだけの状態から、喰むように、咥えるように…
彼女の口内へと犬ちんぽが挿入されていく。

全てを咥え込むと一度そこで止めさせ、その無様な顔をカメラで写す。

「今日はいっぱい記念撮影してやるよ。犬ちんぽ咥えてる写真をバラ撒かれたくなかったら、俺の冤罪写真も消してくれよな」

由佳にそう告げると、彼女は俺を睨み返してくる。

この状態でまだそんな気力があるとは、なんて女だ。

だがやはり、犬ちんぽを咥えたままでは限界があるようで、すぐに苦渋の表情になる。

「苦しがるのは仕方ないけど、そんな表情で動きもせずに咥えてるだけだったらジンも困るよな」

「もっと後にするつもりだったけど……もう一つの力も使ってやろう」

そう言うと俺は第二の力を発動させた。

犬神之力 弐

淫

「っ!?」
みるみるうちに由佳の顔が上気する。
『淫』の力は女を発情させる。
しかもそれは犬に対して最も良く働く。
今、彼女は犬のちんぽを嫌悪しながらも、それが
とても愛おしいものに感じているはずだ。

「っ……んんっ……んっ……」
自発的に体を動かし、ジンのちんぽを乳でしごきあげ、フェラしはじめる由佳。
その顔は力を使う前とはうって変わって恍惚の表情である。
「んん、れろれろ、あむん、ぢゅる、ぢゅるる……んぷっ」
「……ん……んっ……んあっ……はむぅ……ぺろ……ぺろ……んちゅ……れろ……んっ……ちゅう……むちゅ……れろれろ……れろぉ……ちゅぷっ……」
「んちゅる……じゅ、じゅる……ちゅぱつ、んちゅ……んっんく……ちゅぷ……」
夢中で犬ちんぽをなめ続ける由佳。
彼女がちんぽの先端を舐め上げたその時、ジンの体がぶるるっと震えた。

「んぐううううう!!!!!」
口内に獣臭い精液が飛び出してくる。
「飲み込むなよ。 そのまま舌の上に溜めておくんだ」
ずりっ…とジンのちんぽが由佳の口から引き抜かれる。

覗き見える口内には、ジンの精液が白い池のようになっていた。
「はぁ～……はぁ～……っ」
舌の上に犬ザーメンを乗せて目をうっとりさせている彼女を正面から写真に取る。
「もう飲み込んでいいぞ」

俺がそう促すと、由佳はごくりとそれを飲み干した。

ジンへのパイズリフェラが終わり、少し落ち着きを
取り戻した彼女に質問する。
「これからお前を犯す。
俺とジン、どっちがいい？　選ばせてやるよ」
「‼　そんなのどっちも嫌！　選べるわけ無いでしょ‼」
「お前が選ばないなら仕方ない。　俺が決める」

●ジンが犯す
→ジンが犯すフォルダへ
●俺が犯す
→俺が犯すフォルダへ

やはり、この女への仕置にはジンが犯すのが相応しい。
「ジンに犯してもらう」
「ひいっ」
憎しみと怨嗟の視線を向けてくる彼女を無視すると、俺は尻の側に回り込んだ。
「ほら……」
するとジンは初めから何をすべきか分かっていたように、俺の近くまで来て彼女に覆いかぶさるとその性器に自分のペニスをあてがった。
「いっ……や……」
その感触でこれから何をされるか理解したのだろう。
由佳の顔から血の気が引く。
ぐいぐい……
まんこに犬のちんぽが押し付けられる。
「ひ……い……」

ずぶっ…
彼女の中にジンの赤黒いペニスが挿入されていく。
ぐいっぐいっぐいっぐいっ…ぐっ！
ジンは更に体を彼女の背に預けると、激しい動きで
もっと膣奥への侵入を開始した。
「んっ…ぎぃっ！」
苦痛に歪む由佳の顔。
…苦痛？

よく見てみるとジンとの結合部から血が
出ていることに気がついた。
「まさか、お前って処女だったの?」
彼女の遊んでるふうの姿を見て、絶対非処女
だと思っていた俺はその様子に驚く。
「…だったのに」
「?」

「高く…売れるはずだったのにっ！」
彼女を覗き込む俺に怒りの表情を見せる由佳。
なるほど。
自分の価値を分かった上で、誰かに高く売りつけるつもりで初めてを取っておいていたのか。
なんて浅ましい考えだ。

「残念。お前の初めてはジンだ。」
「犬に処女を奪われた気持ちはどう？」
「ぐ…っ…サイアク…っ！」
憎まれ口を叩く彼女だが、その表情は次第に赤みを帯びていく。

犬に犯されることで再び『淫』の快楽が押し寄せてきているのだ。

「ぐぅう！！！　あぐっ！　あはぁあっ！」

ジンが腰を叩きつけるたび、肉と肉がぶつかり合う卑猥な音が教室に響く。

ぱんっ　ぱんっ

しかし、その音は次第に質を変え……

「あはっ……♥　あはああ……♥　ああっ……♥」

じゅぽっ　じゅぽっ　じゅぽっ

湿った性器と性器が絡み合う、にちゃにちゃとした水音に変わっていった。

頃合いだな。

俺は撮影の手を止め、ズボンを脱いで由佳の前にあぐらをかく。
「俺も参加させてくれよ。ほら、コレもしゃぶって」
そう言って彼女に俺のチンポをフェラするよう命じた。
「う……うっ……」
嫌そうな顔をする彼女だったが、すっかり発情してしまっていて目の前のチンポの誘惑に抗えない。
「んちゅ……んぐ……ふぅっ……んっ……うん……。ん……むちゅ……はむ……ちゅ……じゅる……じゅるるるっ……」
「……はぐっ……んちゅ……はぁっ……。ん……ぺろ……ちゅうう……ちゅ……」
犬に犯されながら、いじめていた相手のチンポにむしゃぶりつく由佳。
まさにメス犬といった感じだ。
無様なひょっとこ顔で俺のチンポを舐め上げる。

ジンが腰を叩きつけるたびに、その振動が彼女を通じて俺にも伝わって心地よい。
そのピストンがだんだんと速くなる。
ジンの絶頂が近いのだろう。
「…っ…んっ…っ…んっ…っ…んっ…っ…んっ…っ…んっ！　んんっ！」
由佳も俺のチンポを咥えながら、蕩けたような顔をしている。
その体は次第に小刻みに揺れ始め…
「んーっ！んーっ！…んっ…んっんーっ！…んっ！」

叫び声を上げたことで俺のチンポは彼女の口からぶるんっ
と飛び出し
ビュクビュクッ！
上唇に当たった刺激で勢いよく射精し、その顔を汚した。

「あ……は……あ……は……♥」
呆けた顔で初セックス絶頂の余韻に浸る由佳。
じょろっ……じょろじょろじょろじょろじょろじょろ……
何と信じられないことに、ジンと繋がったままでお漏らしまでしている。
「こんな場所でオシッコするなんてお前、本当に犬以下だな。」
「今度の日曜日予定開けておけ。俺がトイレトレーニングしてやるよ」
そう告げると彼女に後片付けを命じ、俺とジンはその場を去った。

この女のことはどうでもいいが、ジンに何かあったら嫌だな。
仕方ない。
「俺がお前を犯す」
「……っ！」
憎しみと怨嗟の視線を向けてくる彼女を無視すると、俺は尻の側に回り込んだ。
真っ白い尻の下側に由佳のまんこが見える。
初めて女のそれを生で見た俺は、悪い相手のものと知りつつもギンギンに勃起してしまった。
やましい気持ちを振り払うように、その性器に自分のペニスをあてがう。
「いっ……や……」
その感触でこれから何をされるか理解したのだろう。
由佳の顔から血の気が引く。

ぐいぐい…
まんこに俺のちんぽが押し付けられる。
「ひ…い…」
ずぶっ…
彼女の中にいじめていた相手のペニスが挿入されていく。
ぐいっぐいっぐいっぐいっ…ぐっ！
俺は彼女の腰をがっちりと掴むと、ちんぽを突き立て膣奥への侵入を開始した。
「んっ…ぎぃっ！」
苦痛に歪む由佳の顔。
…苦痛？

よく見てみると俺との結合部から血が出ていることに気がついた。
「まさか、お前…処女？」
彼女の遊んでるふうの姿を見て、絶対非処女だと思っていた俺はその様子に驚く。
「…だったのに」
「？」

「高く…売れるはずだったのにっ！」
彼女を覗き込む俺に怒りの表情を見せる由佳。
なるほど。
自分の価値を分かった上で、誰かに高く売りつける
つもりで初めてを取っておいていたのか。
なんて浅ましい考えだ。
「残念。お前の初めては俺だ。犬以下に扱っていた
相手に処女を奪われた気持ちはどうだ？」
「ぐ…っ…死ね…っ…このゴミクズ！」
悔しそうに憎まれ口を叩く彼女。

そんな彼女の顔の側にジンが回り込む。
そして、ジンは仰向けになりチンポを彼女の方に向けた。
「ジンも参加したいってさ。　ほら、しゃぶってあげなよ」
そう言って彼女にジンのチンポをフェラするよう命じた。

「う…うっ…」
嫌そうな顔をする彼女だったが、吸い寄せられるようにジンのチンポを咥える。
「んちゅ……んぐ……ふうっ……んっ……うん……」

その表情は次第に赤みを帯びていく。
犬のチンポを咥えることで再び『淫』の快楽が
押し寄せてきているのだ。

「ぐぅう！！！　あぐっ！　あはぁあっ！」
俺が腰を叩きつけるたび、肉と肉がぶつかり合う卑猥な音が教室に響く。
ぱんっ　ぱんっ
しかし、犬のチンポを舐めあげるたびに、その音は質を変え…
「あはっ…♥　あはああ…♥　ああっ…♥」
じゅぽっ　じゅぽっ　じゅぽっ
湿った性器と性器が絡み合う、にちゃにちゃとした水音に変わっていった。
頃合いだな。

俺に犯されながら、犬のチンポにむしゃぶりつく由佳。
まさにメス犬といった感じだ。
無様なひょっとこ顔でジンのチンポを舐め上げる。
俺が腰を叩きつけるたびに、彼女の股間からは愛液が
飛び散る。
「この状態で感じるなんて…お前、変態だな」
ここぞとばかりに罵ってやる。
「～っ！　…んっ…っ！　～んっ！」
何か文句を言いたげだが、ジンのチンポを咥えている
ので間抜けな喘ぎ声しか言うことができない。
まあ、どんな言い訳されても、こんなに愛液たらしてい
たら説得力ないけど。

『……んっ……っ　……んっ！　んんっ！』
犬のチンポを咥えながら、蕩けたような顔で犯される由佳。
にちゅっ　にちゅっ　にちゅっ
結合部から溢れる湿った音が辺りに響く。
その体は次第に小刻みに揺れ始め……
「……っ……んっ……っ……んっ……っ……んっ……っ……んっ
んんっ！」

俺が一際大きく体をぶつけた時、
「んーっ！んーっ！…んっ…んっんーっ！んっ！」
由佳の体が大きく跳ねる。
「はああああああああっ♥」
彼女はイった。
そして…
びゅくっびゅっびゅっびゅくっ！　びゅくっ！
びゅっびゅっ！
膣内に出される俺のザーメン。
「あっ♥　あっ♥　あ゛あ゛あ゛あっ♥」
その快楽でさらに絶頂する由佳。
叫び声を上げたことでジンのチンポは彼女の口から
ぶるんっと飛び出し
ビュクビュクッ！
上唇に当たった刺激でジンも射精し、由佳の顔に精液
を吹き出した。

「あ…は…あ…は…♥」
呆けた顔で初セックス絶頂との余韻に浸る由佳。
犬ザーメンの匂いに酔いながら、
じょろっ…じょろじょろじょろじょろじょろ…
何と信じられないことにお漏らしまでしている。
「こんな場所でオシッコするなんてお前、本当に犬以下だな。」
「今度の日曜日予定開けておけ。　俺がトイレトレーニングしてやるよ」
そう告げると彼女に後片付けを命じ、俺とジンはその場を去った。

「こんな場所で、こんなっ…格好させるなんて！」

公園に着いて早々、全裸にリードの付いた首輪という破廉恥極まる姿になることを命じられる由佳。

『操』の力で、どんなに嫌でも俺に逆らうことができない。

「だって、おもらしも我慢できないような奴に、人間の服はまだ早いでしょ」

嘲るように彼女に告げる。

「あっいけないいけない。コレを付けるのを忘れてた」

俺が取り出したのは犬耳カチューシャと根本をアナルに入れるタイプの人間用犬のしっぽ。

「くっ…この変態っ…！　キモイキモイキモイ！」

「はいはい。じゃあお前も今から公園で犬の格好してる全裸の変態にしてやるよ」

ぶっ…す…っ！
「ひぃっ…ぐぅッ！」
尻からの異物の挿入感に青ざめる由佳。
苦しそうに前かがみになった彼女に犬耳カチューシャを被せてやる。

「ははっ…お似合いだよ」
「覚えて…なさいよ」
憎々しそうに俺を睨みつける彼女だったが、今の格好で凄まれても笑いしか出てこない。
「さて、じゃあ四つん這いでこの辺を散歩しようか」

「そんなっ…誰かに見られたらどうするの…っ」
「大丈夫だよ。この公園広いから、この辺りにはランニングしてる人や、犬の散歩してる人しか来ない」
「つまり、そういう人は来るってことじゃない！」
「来たら分かるし、その時には草むらに隠れれば良いよ」
「でもっ…」
「うるさい。行くぞ」
「…っ！」

俺に睨まれ、おずおずと四つん這いで歩き
始める由佳。
彼女の側には一緒にジンが歩いている。
少し歩いたところで、遠くに人影が見えた。
「人、来たみたいだな」
「ひっ！」
慌てて低木の塊の後ろに隠れる彼女。

向こうから歩いてきたのは、よく顔を見知っている犬好きのおばさんだった。
今日も愛犬のミミちゃんと散歩しているようだ。
ミミちゃんは可愛い服を着せてもらって、ご機嫌良さそうに歩いている。
「おはようございます」
「おはよう。 ジンちゃんもおはよう～」
にこにこしながら挨拶を交わす。
「そう言えば聞いた？ 守山さんとこのタロウちゃんなんだけど……。」
このおばさんは良い人なんだが、こうなると話が長い。
結果、30分近く彼女の世間話に付き合うことになった。
その間、由佳は低木の裏で自分の存在がバレないか、ヒヤヒヤしていたのだろう。
おばさんが完全に立ち去ってから彼女に声をかける。
「もう行ったぞ」

「……」
おずおずと木の影から出てくる由佳。そんな由佳がぼそりと呟く。
「あんな……」
「あんな?」
「あんな犬でも……服着てるのにっ……」
どうやら素っ裸で怯えながら木の影に隠れていた自分と、犬なのに服を着せてもらって散歩しているミミちゃんを比べて屈辱で胸がいっぱいらしい。
「ミミちゃんは賢いからな」
「それ私のほうが犬より頭悪いってこと⁉あんたブっ殺すわよ！」
体の自由もなく、犬のコスプレさせられて地べたに這いつくばっているくせに態度だけは大きい。
「さあ散歩を再開するよ」
彼女の言葉を無視して、俺は再び公園を歩き始めた。

しばらく散歩していると、由佳の表情の異変に
気がつく。
「……」
こんな目に合わされている怒りや誰かに見つか
るかも知れない焦りではなく、何かを言いたげで…
でもそれを言えないでいるような顔だ。
「どうした？」
「…何でも無い」
そう言って誤魔化す彼女だったが、顔はそう言っ
ていない。
「もしかして、おしっこかウンチを我慢してる？」

「!!」
図星だったのだろう。
恥ずかしさで顔がみるみる上気していく。
なるほど。それが言い出せなくて、顔を赤くしたり青くしたりしていたのか。
「そうよ！　分かってるなら、トイレ行かせてよ！
もう…限界…なの」
どうやら、俺達が長話をしているあいだ、ずっと我慢していたらしい。
「そこですればいいじゃないか」
「そんのできるわけ無いでしょ！　だって…」

●彼女は尿意があると言った
→尿フォルダへ
●彼女は便意があると言った
→便フォルダへ

「こんなとこでおしっこ…できない」
顔を赤らめながら、そう言う由佳。
「たしかにそうだね」
「それじゃあ、トイレに……！」
「その辺りは草木が生えてるから、直接おしっこをかけると枯れてしまう。」
「ここらの道でしよう。大丈夫。水もトイレシーツも持ってきてるから」
「そういうことじゃなくてっ！」

「…ここでしないなら、もっと人がいる場所でさせても
いいけど？」
「ッ！」
顔を青ざめさせる由佳。
俺に命令されれば、人前であろうが警官の前であろうが
放尿してしまう。
覚悟を決めるしかなかった。

「当然、犬がおしっこするポーズでしてね」
「ひ…いっ！」
彼女の意志に反して、四つん這いのまま片足があがる。
隠すことも出来ず丸出しになるマンコ。
だが、操るのはここまでだ。
「さあ。おしっこしていいぞ」
「う…うっ…」
今日はいい天気とはいえ野外で裸。
しかも俺とおばさんとの会話中、ずっと我慢していたのだ。
もう限界だろう。

しょろっ…
彼女の尿道まで丸見えの恥部から、黄色い液体が飛び出す。
みるみるうちにそれは量を増し、勢いよく弧を描いた。
「うっわ…すごい。ずいぶん我慢してたんだね」
「ううっ…見るなぁ…」
羞恥心で顔を真っ赤にする由佳。

やがて勢いを失った尿は彼女のマンコから太ももへ
流れはじめる。
「きったないなあ。こんなにおしっこするのが下手
なんて」

由佳が全ての尿を出し切った後、水をかけてトイレシー
ツで吸い取り、汚れた太ももを拭いてやる。
汚いが躾する立場の人間の義務だ。
俺がそうしていると、ジンもおしっこをしたくなったよ
うだ。
彼女の前で「こうするんだよ」と言わんばかりにきちんと
尿をする。

「ほら。　ジンがお手本見せてくれたよ。　次から
ちゃんとああやってするんだぞ」
そう言いながら彼女の股間を拭くと…尿でない
液体で濡れていることに気がついた。

「まさか、ジンのチンポ見て興奮してんの…？」
「……」
彼女は無言だったが、それは俺の発言への肯定だった。
由佳の股間からは愛液が止めどなく流れ出してくる。
仕方ない。

「ジン、悪いけどコイツと交尾してやって。
こんなマンコびちょびちょにしてたら連れて
歩けないよ」

　そう言ってジンを呼び寄せると、公園の木々
が覆い茂っている所まで移動し、野外セックス
をさせることにした。

ずりゅんっ！
「あ…ひっ！」
ジンのチンポが由佳の中に挿入される。
つい最近まで処女だったはずなのに、ずいぶん
スムーズに入ったな…。

「もう処女じゃなくなったから、男とヤりまくってんの？答えて」
力を使って、彼女に命令する。
「はあっ…はあっ…自分で…オナってぇ…る…ディルド…買ってきて…」
「ふあっ…ふああっ…腕くらいの大きさのだったけど…すぐっ…入るようになったから…はあっ　はあっ…」
「一日何回くらいしてる？」
「…っ…わかんない…10回はしてる…」
10回!?

由佳の腕は女子だから細い…が、それでもマンコに突っ
込むにはそこそこのデカさがある。
それを一日10回もイくまで使っていたら、そりゃこんな
になるのも当然だ。
「あはっ…♥　あはああ…♥　ああっ…♥」
屋外で犬に犯されているというのに、由佳の顔が蕩け始
める。
このまま大声で喘ぎだしたら誰かに見つかるかもしれ
ない。
念の為釘を刺しておこう。
「言っておくけど、ここ外だからね。声出したら人に見つ
かるよ」
「!!」
俺に言われて今の状況を思い出したのだろう。
慌てて口を閉じ、喘ぎ声を我慢し始めた。
「…っ　…んっ　…っ　…んっ…っ　…んっ…っ　…
んっ…っ　…んっ！　んんっ！」

ジンの腰を振るスピードがあがる。
そろそろ限界が近いのだろう。
「んーっ♥　んーっ♥　…んっ♥」
由佳も声を我慢することで快感が増幅して
いるのか何度と無く軽イキしているようだ。

そして…
びゅくっびゅっびゅっびゅくっ！　びゅくっ
びゅっびゅっ！
ジンが射精する。
「ん～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～っ♥♥♥♥」
彼女も合わせてイったようだ。

「はぁ…はあ…はあ…」
体をガクガク震わせながら、何とか倒れ込まないように
耐えている。

由佳の上に覆いかぶさっていたジンは彼女と結合したまま、くるりと後ろを向く。

そう。

初めての時は抜いて終わりにしたが、ここからが犬の交尾の本番だ。

彼女が終わりだと思っていた交尾は、まだまだ中盤戦なのである。

「あっ！　あっ……ああっ！　はあっ♥」

既に限界いっぱいいっぱいだった快楽が、終わること無く押し寄せてくることに悶える由佳。

思えば『淫』の力で初めての時にイったくらいだ。

オナニーして快楽を貪った体で交尾したら、その比じゃないほど感じるに決まっている。

「んっ……ふうっ♥」

また喘ぎ始める由佳。

しかし……そろそろ、ただ見ているだけでは退屈になってきたな。

よし。俺も参加させてもらおう。
「この交尾、しばらく続くから…空いてる方の穴使うよ」
「あ…いてる…ほぅの…あな？」
呆けた顔で聞き返す彼女を無視して、手早くコンドームを装着するとアナル尻尾を引き抜いてケツ穴にチンポをねじ込む。
「んひぃッ！！」
マンコで犬と繋がりながら肛門に同級生のチンポを入れられる由佳。

「あ…ああ…ぁ…！」
目を見開いて異物感に耐えている。
「アナルセックスも初めて?」
「そんな…の…やっ…あっ…るわけない…じゃ…ああっ！」
反応で分かっていたが、あえて質問し答えさせる。
「…ぐうぅっ…あんたなんかに…お、お尻を、犯されるなんて…あぐうぅっ…」

悔しそうな中にも、この行為に感じているであろう艶めかしい表情。
俺をいじめていたこの女が、俺にアナルを犯されながらこんな顔をするなんて。
たまらない。
俺は激しく腰をぶつけ、彼女のケツ穴を嬲る。
一際大きく腸内にチンポを叩きつけた時、彼女の体がびくんと跳ねた。
「あっ……あっ……あああああああっ♥」

「うっ……！」
びゅるっ！　びゅくっ！
「ワウ！」
びゅくっびゅくっびゅくっびゅるるるっ！
全員が絶頂する。
夢中になっていたが、改めて考えるとこんな場所で
物凄いことをしていたな……。
射精して冷静になった俺は慌ててコンドームを外す
と、ズボンを履き直した。
その時だった。

「何かしら。 変な声がしたけど…」
さっきのおばさんが散歩を終え帰ってきたのだ。
由佳とジンはまだ繋がったまま。
まずい。
今見つかって大声を出されて人が大勢きてしまったら、俺の力では対処しきれない。
ここは何とか上手くごまかさないと。

「どうも。　これからお帰りですか？」
あえてこちらから声をかける。
「そうなんだけど…さっき、この辺で女の人の悲鳴みたいな声しなかった？」
「ああそれなら、俺がスマホで聞いてた女性ボーカルの曲、ミスってボリューム最大にしちゃって」
「そうなの。　確かにスマホって変なところ触ると、急に大きな音でたりするわよねえ」
「そうですねー」
低木の茂み一つ隔てて交尾している愛犬とクラスメイトを隠すために必死で話を合わせる。
「あらいけない。　ホントはね、もっとお話ししたいんだけどこれから買い物して帰らないといけないのよ」
よし。助かった。
「だからジンちゃんに挨拶して、今日はもう帰るわ～」
「っ！」
まずい……！

「じゃ。　ジンちゃん、またね～」
え？
振り返ると、低木の影からジンが体半分だけを出していた。
無論俺は気付いている。
ジンはまだ由佳と繋がったままであることを。
ジンはおばさんが自分たちの方へ来ないように機転をきかせたのだ。
そのおかげで、この場を乗り切ることが出来た。
やがて去っていくおばさんの影が見え無くなると、俺はふたりの所へ移動する。

ずりんっ…
ようやくジンのチンポが抜けた時、由佳の顔は緊張の糸が解けたことと、膣内が犬ザーメンで満たされたことで酷いアヘ顔になっていた。
「あは…♥　あへはは…♥」

「その…したいのは…おおきいほう…だから」
顔を赤らめながら、そう言う由佳。
「そうなんだ」
「だからトイレじゃないと…！」
「その草の上にして。大丈夫。ちゃんとそれも回収するやつ持ってきてるから」
「そういうことじゃなくてっ！」

「…ここでしないなら、もっと人がいる場所で、ぶりぶりウンチさせてもいいけど？」
「ッ！」
顔を青ざめさせる由佳。
俺に命令されれば、人前であろうが警官の前であろうが排泄してしまう。
覚悟を決めるしかなかった。
「せっかくだからチンチンのポーズでしてもらおうか。ジン、こいつに教えてあげて」
俺にいわれチンチンのポーズをとるジン。
「うそ…そんな恥ずかしい格好でっ…！」

彼女の意志に反して、チンチンのポーズをする由佳。
隠すことも出来ず丸出しになるマンコ。
彼女が尻から排泄できるように、アナル尻尾をとってやる。
「さあ。思いっきりウンチしていいぞ」
「う……うっ……」
今日はいい天気とはいえ野外で裸。
しかも俺とおばさんとの会話からその後の散歩の間、ずっと我慢していたのだ。
もう限界だろう。
だが、さすがに理性が先にたつ。
人としてこんな場所でウンチをするわけにはいかないというプライドが。
仕方ない。
手を貸してやるか。

俺は彼女に触れ、『操』の力をさらに増幅させる。
「んっ…ひいっ！」
ぶうっ！
まずは大きな屁がでた。
「くっさいオナラだなあ。こんな下品なオナラできるんだったら、もうコレ以上恥ずかしいことなんて無いでしょ。」
「さっさとウンチしちゃいなよ」
「いっ…や…それ…だけは…！」
彼女の顔で『操』の文字が光を増す。
「うっ…ひッ…だ…め…」

ぶり…
丸出しまんこの下側、肛門部分から茶色い塊が
顔をのぞかせる。

ぶりぶりぶり…
彼女のがんばりも虚しく、どんどんひり出されて
いく大便。

それは地面に触れると向きを変え、大蛇のようにのたうち
ながら折り重なっていく。
「うっわ、臭っさ！　外なのにめちゃめちゃ臭い！オェ…
犬のウンチと比べ物にならな…ゲホッ…ウェゲッホッ！」
「～～～～～～～！」
羞恥心で顔を真っ赤にする由佳。

やがて全てを出し切った彼女。
彼女のお尻にはさっき放り出したウンチが
まだついている。

「うわ…きったな…」
ぼそりと言いつつも、彼女の肛門を拭いてやる。
汚いが躾する立場の人間の義務だ。

「あー臭かった…。　それにしてもこんなにひり出すなんて。」
「大きめの袋持ってきておいて良かったよ…」
悪態をつきながら尻を拭き終わって彼女の股間を見ると、そこ
から溢れ出した液体が滴っていることに気がついた。

「え…ちょっと、こんな場所でウンチして興奮してんの⁉」
「違っ…！　さっき…アレ…みたから」
「アレって…まさか、ジンのチンチン？」
「……」
彼女は無言だったが、それは俺の発言への肯定だった。
この女、ジンがチンチンのポーズを取ったときに見えたチン
ポで欲情してやがる。

俺が呆れている間にも、由佳の股間からは愛液が止めどなく
流れ出してくる。

仕方ない。

「ジン、悪いけどコイツと交尾してやって。こんなマンコびちょびちょにしてたら連れて歩けないよ」

そう言ってジンを呼び寄せると、公園の木々が覆い茂っている所まで移動し、野外セックスをさせることにした。

ずりゅんっ！
「あ…ひっ！」
ジンのチンポが由佳の中に挿入される。
つい最近まで処女だったはずなのに、ずいぶんスムーズに入ったな…。
「もう処女じゃなくなったから、男とヤりまくってんの？　答えて」
力を使って、彼女に命令する。

「はあっ…はあっ…自分で…オナってぇ…る…ディルド…買ってきて…」
「ふあっ…ふああっ…腕くらいの大きさのだったけど…すぐっ…入るようになったから…はあっ　はあっ…」
「一日何回くらいしてる?」
「…っ…わかんない…10回はしてる…」
10回!?
由佳の腕は女子だから細い…が、それでもマンコに突っ込むにはそこそこのデカさがある。
それを一日10回もイくまで使っていたら、そりゃこんなになるのも当然だ。
「あはっ…♥　あはあああ…♥　ああっ…♥」
屋外で犬に犯されているというのに、由佳の顔が蕩け始める。

このまま大声で喘ぎだしたら誰かに見つかるかもしれない。
念の為釘を刺しておこう。
「言っておくけど、ここ外だからね。　声出したら人に見つかるよ」
『!!』
俺に言われて今の状況を思い出したのだろう。
慌てて口を閉じ、喘ぎ声を我慢し始めた。
「…っ　…んっ　…っ　…んっ…っ　…んっ…っ
…んっ…っ　…んっ！　んんっ！」

ジンの腰を振るスピードがあがる。
そろそろ限界が近いのだろう。
「んーっ♥　んーっ♥　…んっ♥」
由佳も声を我慢することで快感が増幅しているのか
何度と無く軽イキしているようだ。

そして…
びゅくっびゅっびゅっびゅくっ！　びゅくっ！びゅっびゅっ！
ジンが射精する。
「ん～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ♥♥♥♥」
彼女も合わせてイったようだ。

「はぁ…はあ…はあ…」
体をガクガク震わせながら、何とか倒れ込まないように耐えている。
由佳の上に覆いかぶさっていたジンは彼女と結合したまま、くるりと後ろを向く。
そう。
初めての時は抜いて終わりにしたが、ここからが犬の交尾の本番だ。
彼女が終わりだと思っていた交尾は、まだまだ中盤戦なのである。

「あっ！　あっ…ああっ！　はあっ♥」

既に限界いっぱいいっぱいだった快楽が、終わること無く押し寄せてくることに悶える由佳。

思えば『淫』の力で初めての時にイったくらいだ。オナニーして快楽を貪った体で交尾したら、その比じゃないほど感じるに決まっている。

「んっ…ふうっ♥」

また喘ぎ始める由佳。

しかし…そろそろ、ただ見ているだけでは退屈になってきたな。

よし。

俺も参加させてもらおう。

「この交尾、しばらく続くから…開いてる方の方の穴使うよ」
「あ…いてる…ほぅの…あな?」
呆けた顔で聞き返す彼女を無視して、コンドームを装着するとケツ穴にチンポをねじ込む。
「んひぃッ!!」
さっきキレイに拭いておいてよかった。　気兼ねなく、この穴を使うことができる。
マンコで犬と繋がりながら肛門に同級生のチンポを入れられる由佳。

「あ…ああ…ぁ…！」
目を見開いて異物感に耐えている。
「アナルセックスも初めて？」
「そんな…の…やっ…あっ…るわけない…じゃ…ああっ！」
反応で分かっていたが、あえて質問し答えさせる。
「…ぐうぅっ…あんたなんかに…お、お尻を、犯されるなんて…あぐうぅっ…」
悔しそうな中にも、この行為に感じているであろう艶めかしい表情。
俺をいじめていたこの女が、俺にアナルを犯されながらこんな顔をするなんて。
たまらない。

さっき悪臭を嗅がされた意趣返しとばかりに激しく
腰をぶつけ、彼女のケツ穴を嬲る。
一際大きく腸内にチンポを叩きつけた時、彼女の体が
びくんと跳ねた。
「あっ……あっ……あああああああっ♥」

「うっ……！」
びゅるっ！　びゅくっ！
「ワウ！」
びゅくっびゅくっびゅくっびゅるるるるっ！
全員が絶頂する。
夢中になっていたが、改めて考えるとこんな場所で
物凄いことをしていたな……。
射精して冷静になった俺は慌ててコンドームを外す
と、ズボンを履き直した。
その時だった。

「何かしら。　この匂い…」
さっきのおばさんが散歩を終え帰ってきたのだ。
由佳とジンはまだ繋がったまま。
まずい。
今見つかって大声を出されて人が大勢きてしまったら、俺の力では対処しきれない。
ここは何とか上手くごまかさないと。

「どうも。　これからお帰りですか？」

あえてこちらから声をかける。

「そうなんだけど…なんか凄く臭くない？　くっさ！
臭いわぁ　この辺り」

「ああそれなら、コレのせいですかね」

中身がたっぷりつまったマナー袋を見せる。

「ちょっと溜まってたみたいで…」

「そうなの。　でもこんなに臭いなんて、ジンちゃん体調悪いのかしら。　心配だわ」

「そうですね。　少し様子を見て、悪いようだったら早めに病院に行きます」

「それがいいわ。　そうしなさい。　こんな臭さ、ワタシ初めてだもの」

低木の茂み一つ隔てて交尾している愛犬とクラスメイトを隠すために必死で話を合わせる。

「あらいけない。　ホントはね、もっとお話したいんだけどこれから買い物して帰らないといけないのよ」

よし。助かった。

「だからジンちゃんに挨拶して、今日はもう帰るわ～」

「っ！」

まずい……！

「じゃ。　ジンちゃん、またね～」
え？
振り返ると、低木の影からジンが体半分だけを出していた。
無論俺は気付いている。
ジンはまだ由佳と繋がったままであることを。
ジンはおばさんが自分たちの方へ来ないように機転をきかせたのだ。
そのおかげで、この場を乗り切ることが出来た。

やがて去っていくおばさんの影が見え無くなると、俺は
ふたりの所へ移動する。
その時、由佳は通りがかりのおばさんにすら自分の排泄
物が臭い臭いと言われ、悔しさで顔を真っ赤にしていた。

野外でのプレイが効いて彼女も多少は大人しくなった…
かと思いきや、現実はそう甘くなかった。

「この町の犬たちがあの女の嫌がらせに迷惑している」
ある日、夢の中に犬神様が現れ、俺にこう告げた。

あの女…俺がいじめられなくなったから日々のストレスを犬にぶつけているのか。

なんて奴だ。

「以後そういう事が無いよう、彼女にきつく仕置きをいたします」
「うむ。　その件、嫌がらせを受けた犬たちにも復讐の機会を与えるがよい」
「わかりました」
そう俺が答えると、犬神様は光の中へ消えていった。

次の日。
放課後、由佳に声をかける。
「俺をいじめなくなったかわりに、最近は犬をいじめているらしいじゃないか」
「っ！　何でそれをっ⁉」
俺の指摘に動揺を隠しきれない由佳。
「あんたストーカーなの？　私のこと、逐一監視してんの？」
「…悪いことってのは、隠れてやってもいつかはバレるものなんだよ」
「げぇ…めっちゃキモいんだけど！　うっわかゆかゆかゆ！　いつもアンタに見られてると思ったら、全身カユくなってきた‼」
最近はしおらしくなっていたと思った由佳だったが、それは猫を被っていただけだったようだ。
以前のような調子で、俺のことをバカにしてくる。
「で、何すんの。　またレイプでもすんの？」
「ワタシぃ～公園で犬と犬以下の男に犯されたことがあってぇ～それに比べたら、もう何されても別に怖くないんですけど～」
ひどくムカつく顔で嘲ってくる。
「…そうか。　なら付いてこい」
俺は彼女に命令すると、旧校舎の教室に向かった。

「はいはい。今日はここでヤるのね」
そう言うと、もう服を脱ぎ始める由佳。
「汚れるとヤだし、先に脱いどくわ。あんまり遅いと
親がうるさいから、さっさと終わらせて」
開き直りの極地である。
いいだろう。
ならとことんやってやろう。

「みんな、もう出てきていいよ」
「!?」
教室の外から入ってきたのは由佳にいじめられた犬たちだった。

「今日はこの子たちの相手をしてもらう」
「い、いやっ！」
慌てて逃げ出そうとする彼女。

だが、扉から外に出ようとした瞬間、その体が弾かれる。
「この部屋には〝結界〟が張ってある。俺の許し無く、
出ることも中に入ることもできない。」
「でも安心して。声も外には届かないから。思いっき
り喘いでも大丈夫だよ」

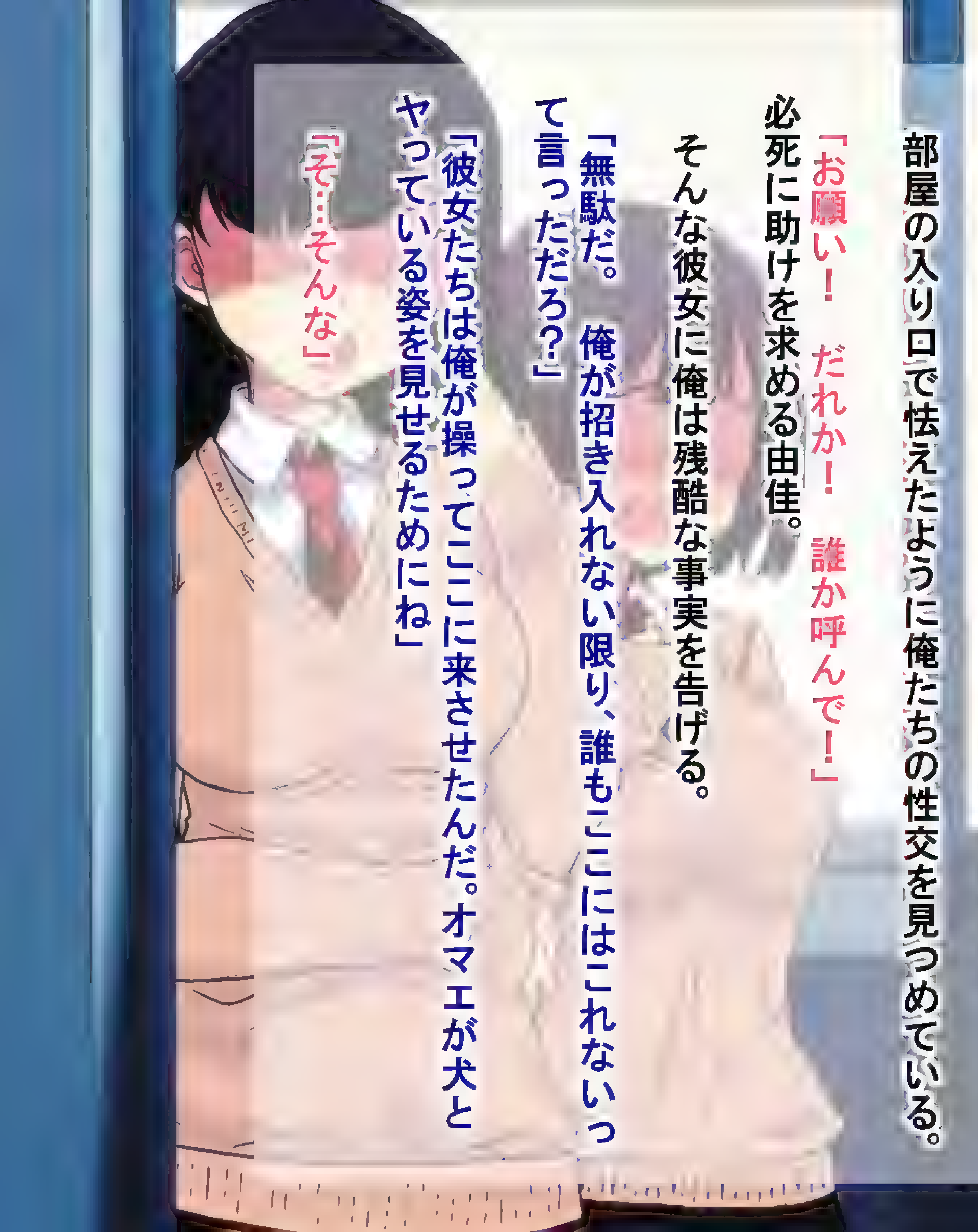
口には大きな犬チンポが挿入され、息をするのもギリギリ。
俺が『操』っておかなければ、そのままチンポに噛み付いてしまいそうな状態だ。

「…んっ…あがっ　…あんっ！　んんっ！」

マンコに挿入していた犬が射精する。
「んーっ♥」
射精の勢いで由佳が震え、それが口に入れていた犬の射精を誘発する。

びゅくっびゅくっびゅるるるっ！
びゅくっびゅっびゅっびゅくっ！
「ん～～～～～～～～～～～～っ！」
ぱんぱんに頬張ったチンポから吐き出される生臭い犬ザーメン。
それは彼女の口に収まりきらず、喉奥から鼻孔内を通って鼻から噴出する。
「ぶふ～ッ！！！」
彼女から犬に手を出すことは禁じているので、犬が口からチンポを抜いてくれない限り息をすることができない。
「…んっ　…んっ　んーっ！　…んっ！」

ずるり……
「っ……！　はあっ！　はあっ！　はあぁ～～～～っ！」
窒息寸前のところで、ようやくチンポが引き抜かれ荒々しく呼吸をする由佳。
涙を目いっぱいに溜め、鼻から犬の精液を垂らし、顔面を液体でどろどろにしている。
「はあっ……はあっ……もうやめれぇ……しんじゃう……」
「まだまだ。　お前に恨みを持っている犬はいっぱいいるからな」
息も絶え絶えな彼女に残酷な事実を告げる。



その時だった。

「ひいっ！」

「由佳っ…何っ！？」

今まで人っ子ひとり来なかった教室の入り口から悲鳴のような声が響く。

「‼」

とんでもない場面を見られ焦る由佳。　だがこれはチャンスだと思ったのだろう。

「助けてっ！　私、コイツに脅されてこんな目にっ！」

犬と繋がったまま、必死に友人たちに呼びかける。

だが…彼女たちは由佳を助けようとはしなかった。

部屋の入り口で怯えたように俺たちの性交を見つめている。

「お願い！　だれか！　誰か呼んで！」

必死に助けを求める由佳。

そんな彼女に俺は残酷な事実を告げる。

「無駄だ。　俺が招き入れない限り、誰もここにはこれないって言っただろ？」

「彼女たちは俺が操ってここに来させたんだ。オマエが犬とヤっている姿を見せるためにね」

「そ…そんな」

「じゃあ続きをしようか。　ほら、気持ちいいなら喘いで良いぞ。」
「友達がいるからって遠慮しなくていいよ」
「やっ…あっ…」
友達の前だというのに犬チンポを激しく出し入れされる由佳。

「いやっ！　やめてぇ！　見ないでぇ」
「ちょ…ちょっと…」
「やめてあげなよ…由佳…嫌がってんじゃん…」
強く精神を操っていないので、俺のことを止めようとする由佳の友人。
「もう少し見てて。　すぐに本性現すから」
そう言って彼女たちを制し、由佳の様子を観察させる。

かなり引き気味で彼女を見つめる友人たち。
「見ないでよっ！　これ以上見たら殺すからっ！
いやあっ！　見るな！　見るなあ！」
自分が犬に犯されるさまを見られたくなくて、手をじたじたさせる由佳。
だがそんなことはお構いなしに、犬たちは激しいピストンで由佳を蹂躙する。
そうこうしているうちに、由佳の体はだんだんと交尾の快楽に支配されていく。

「ああっ♥　あはぁっ♥　んはぁっ♥」
「あれ…」
「由佳…？」
彼女の様子が変わったことに友人たちも
気づいたようだ。
俺が彼女たちに見守るように言ってから
数分もしないうちに、
「んっっ…♥　んんっ…♥　んん～っ♥」
そこには一匹の淫乱なメス犬の姿があった。

蕩けた顔で犬のチンポをねぶり、犬に乱暴に犯され
悦ぶその姿を見て、友人たちは明らかな嫌悪の表情を
浮かべている。
「ひいっ…キモい！」
「マジヤバ…何こいつ！　何でこんな事されて…気
持ちよさそうにしてんの」
蔑んだ目が由佳に突き刺さるが本人はそれどころで
はないようだ。

「んん！　んんッ！　んん～っ♥」
押し寄せる快楽に必死に耐えている。
さすがに俺のチンポに犯されて、犬チン舐めながら
友だちの前で絶頂したくはないよな。
よし。　彼女が気持ちよくイけるように、友人にも
応援してもらおう。

「ねえ君たち。たしかチアリーディング部だよね。
彼女が中々イけないみたいだから応援してあげてよ」
『操』
俺に命令され、由佳の側までやってくる友人たち。

2人はおもむろに片腕を挙げると、
「いっけーいけいけ！　いけいけ！　GO！GO！
いっけーいけいけ！　いけいけ！　GO！GO！」
運動部の大会の時のように声を上げて踊り始めた。
由佳にとって最悪の状況である。
こんな状況で無様にイかされたら、もう立ち直れないだろう。

だが、膣から出し入れされるチンポと現実感のない応援コールが次第に彼女から思考力を削り取っていく。
「ううっ…ぐうっ…いやっ…イきっ…たくないっ……いやっ♥　やあっ…いやっ…ひあああああっ！」
彼女の体が大きく仰け反る。

「いっはぁああああああああああああっ♥」
ビクビクビクッ！！
友人の前で激しくイク由佳。

それに呼応するかのように、全身に出される
犬ザーメン。
びゅくっびゅっびゅくっ！　びゅくっ！
「お゙ッ♥　お゙お゙ッ♥　お゙お゙お゙お゙ん゙♥」
ビクビクッ　ビクンビクンッ！
汚らしい咆哮をあげ、もう一度絶頂する由佳。

「げぇ…」

「キショ…」

彼女たちの青ざめた表情からは、隠しきれない嫌悪感が見て取れた。

「あひぇ…♥あひぇ…♥」

全身に犬ザーメンを浴びながら、絶頂して呆けている由佳を見下ろす。

「今日はこれくらいにしておいてやる。だが、お前に借りを返したい犬はまだまだいるんだ。それが終わるまで、ずっとこういうことを繰り返す。」

「永遠にこんな目に合いたくなかったら、もう二度と犬をいじめるんじゃないぞ」

そう吐き捨てるようにいうと、俺は結界を解いた。

汚れていた部屋、白濁液まみれだった由佳が嘘のように元通りになる。

俺はそのまま彼女を放置して、犬たちと一緒に帰途についた。

あれから由佳は何度と無く、いじめてきた犬たちの
慰みものになった。
さすがに彼女もこの仕打ちには反省するしかないだろう…
と思っていたのだが、そんなことはなかった。
むしろその逆だ。
彼女は快楽に溺れすぎている。
犬や俺とセックスするという嫌悪感が、行為の気持ちよさに上書きされている気がするのだ。
駄目だ。　これでは罰にならない。
むしろ、犯されることを期待して、いじめを助長することに繋がりかねない。

「またこんなところに呼び出して。　今日はどんな犬とヤらせる気なのよ」
やっぱりだ。
俺を睨みつつも、期待しているような雰囲気を感じる。
そこで俺は切り出す。

「いや。今日はしない。というか、もうしない。
だってお前、悦んでるだろ」
「!!」
「そんなっ、そんなわけ無いでしょ！」
焦りながら俺の言葉を否定する由佳。
「だが、だからと言って許したわけじゃない」

犬神之力 参

禁

「…っくぅ…な…なにしたの…？」
「イけなくした」
「は？」
「もうお前は、絶頂することができない。　俺が許可しない限りはな。」
「まあ、お前が心を入れ替えていじめなんてしないようなら、いずれ元に戻してやるよ。　さあ、もう帰って良いぞ。俺はもうお前を呼び出したり、話しかけたりしない」
俺の発言に、きょとんとした顔になる由佳。
だがすぐに勝ち誇ったように笑い始める。
「は…はははははｗ　何だ、もう終わり？　別にいいわよ！　あんたみたいなキモい奴に関わらなければ、いじめなんてしたくならないし！」
「言われなくても、もう二度と話す気ないから。　じゃあね！」

……。

心を入れ替えるなら、まずは謝るところからだ……俺は、その言葉を必死で飲み込んだ。

俺が言って、そのとおりに謝らせても意味はない。

由佳が本心から「ごめんなさい」と言うのを待つべきなのだ。

そう胸の内に思いながら、俺は部屋を出ていく彼女を無言で見送った。

俺が由佳に何もしなくなってから一ヶ月がたった。
彼女がいじめを止めると、周りのみんなも昔のように俺と話をしてくれるようになり、平和な日々が続いていた。
だが……
ここ数日、由佳の様子がおかしい。

彼女の友人に聞いてみると、どうやら最近、運動部の男に手当たり次第に「彼氏になって」と声をかけていたらしい。
その努力が実を結び、晴れてラグビー部の部長と付き合うことになったとか。
何か企んでいるのか…？

そう訝しんでいたある日、俺は机の中に手紙があることに気づいた。
由佳からの手紙だった。
《明日、夕方5時にジンと一緒に旧校舎裏の体育倉庫まで来て欲しい》
明日…か。
俺は久しぶりに彼女に会うための準備をし始めた。

～旧校舎裏　体育倉庫～

「何の用？　こんな場所に呼び出して」
もじもじしている由佳の様子を無視して
要件を聞く。
「……い……け……ないの」
「…ああ。　まだ元に戻してないからな」

「なんでよぉおおおおっ…イかせてよぉおおおおおっ！」

「…だってお前、全然反省してないだろ」

「してる！　してるからぁ！　反省してるからあ！…お願い…一回だけでいいの！　…イかせてよぉ。」

「あれからずっと…ずっと…イけなくて辛いのぉ…お願い…イかせて…イかせてよぉ…！」

涙目で懇願してくる彼女。

全く、仕方がないな。

「わかったよ。　じゃあ、服脱げよ」

「…」

以前のように嫌がりもせず、恥ずかしがりながらもするすると服を脱ぐ由佳。

学生服を脱ぎ、下着を脱いだ時…俺は驚愕した。

「なっ……!?」
乳首がどす黒く変色し、乳輪が以前の倍以上になっていた。

よく見ると乳首だけではない。マンコも茶黒くなり、ビラビラが伸びて酷いことになっている。
「どうしたの…それ」
脱いでからずっと口をつぐんでいる由佳に問いただす。

「イけなくて…イきたくて…今日はいじめしてないから、元に戻ってるかも…って思って、いじってみたけどイけなくて、もしかして今日は… もしかして今日は…ってずっといじってたら…こんなことに…」
どれだけいじったら、こんなになるんだ…。
俺は半ば呆れながら彼女に言う。
「そんなにイきたいならヤってやるよ。 ただし、いつもとは違って目隠しプレイさせてもらう」
「嫌だけど…そ、それくらいなら…」
ウソつけ。
もう期待して濡らしてるじゃないか。
指摘するのも面倒なので手短に要求を告げる。

「ここに四つん這いになれ」
『……』
俺の言葉に従順に従い、地面にしかれたマットの上に
犬のようなポーズで這いつくばる由佳。

そんな彼女に背後から目隠しをする。
「さて、目隠しも終わったし、早速はじめようか。
ほらジン。こいつに交尾してやって」

ちゅむっ…
「はっ…あ♥」
久しぶりの犬チンポが由佳のマンコを貫く。
「あはっ…♥　あはあああ…♥　ああっ…♥」

ジンのチンポを求めるように、その腰つきに合わせて尻を振る彼女。

最初からこんなに乱れているなら『淫』の力を使うまでも無いほどだが、この後の仕込みのために彼女にはせいぜい感じてもらう必要がある。

「あっ♥　あああああっ♥　久しぶりの……いぃいいいいっ♥」

興奮が高まり、愛液がどんどん溢れ出してくる。

ぐちゅっ　ぐちゅっ　ぐちゅっ　ぐちゅっ　ぐちゅっ

「んっ♥　んっ♥　んっ♥　んっ♥　んっ♥」

淫らな音を教室に響かせ、夢中でジンと交尾している彼女。

……頃合いだな。

「ジン。待て。コイツから離れて」
「えっ!?」
良いところで止められて困惑する由佳。
「お前、犬との交尾に慣れすぎ。ブサイクな顔でよがっちゃってさあ。みっともない。」
「俺をいじめてた時は俺の顔に≪ナマコのほうがマシｗｗｗ≫とか言ってたくせに。俺の制服捨てた時も≪服が犬臭くて息できない≫って言ってたよね」
「お前、いま全身から犬のニオイさせてるぞ?」

わざと怒りを掻き立てるように、ここぞとばかりに彼女を罵る。
「ぐ…ぐう…ッ」
俺に煽られて顔を赤くする由佳。
これはさっきまでの快感によるものではない。
俺への憎悪による上気だ。
「ちょっとは人間様のチンポにも慣れといたほうがいいんじゃないの？　今後のためにもさあw」

ずぷっ…
「ッ―!」
ズプッ　ズプッ　ズプッ　ズプッ　ズプッ　ズプッ!
激しく突き立てられるチンポ。
「ぐうッ!」
だが由佳は怒りの表情を崩さない。
「くっそ下手くそ!　ぜんっぜん気持ちよくない!
犬のほうが1000倍マシ!」

ズプッ！　ズプッ！　ズプッ！　ズプッ！　ズプッ！

さらに激しく叩きつけられる腰。

「だから気持ちよくないって！　勢いだけで何とかなると思ってんの⁉」

「そもそも太さが違うのよ、この粗チン！いいから、さっさと犬に代わって！　この下手くそッ！」

全力で罵倒する由佳。
何処からこんな汚い言葉が湧いて出るのだろう。
聞いていると頭が痛くなってくる。

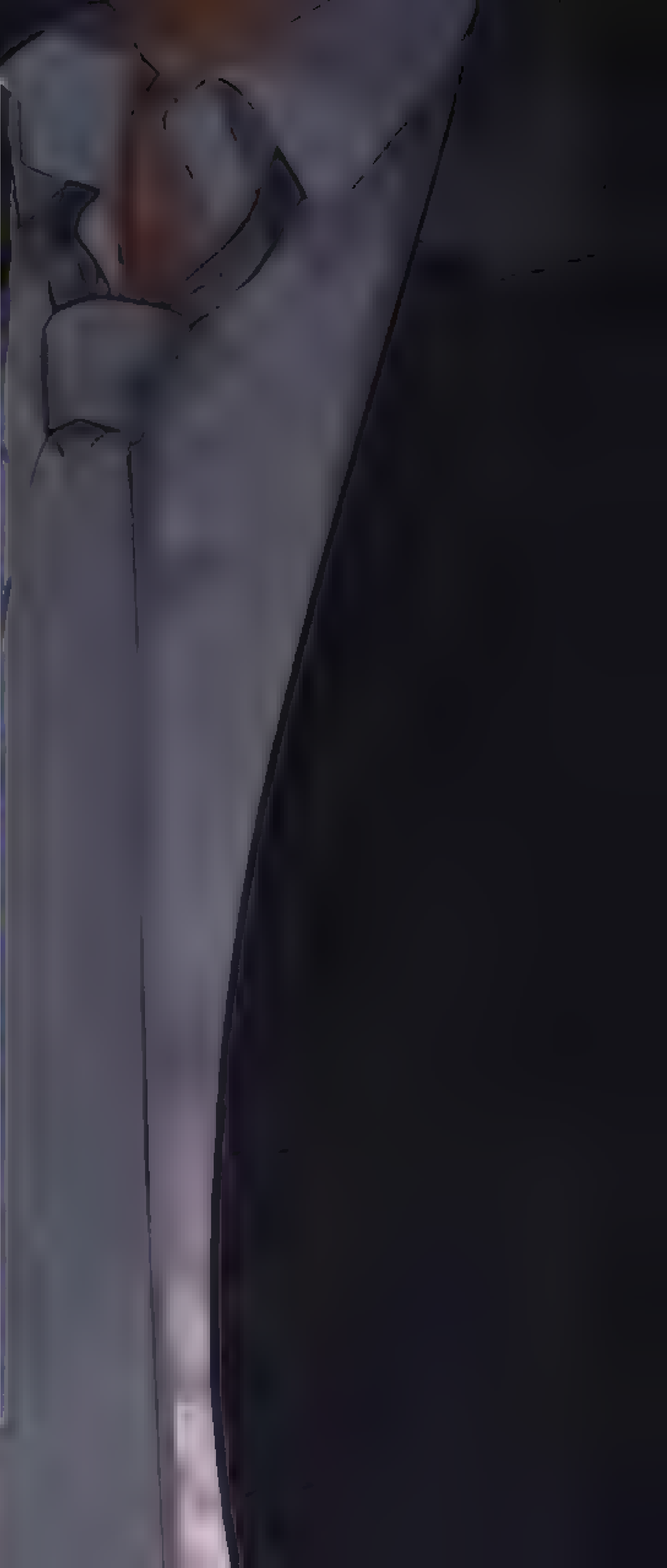
やがて…
そのチンポは力なく抜かれ、代わりにジンの
チンポが挿入される。

「ああああああっ♥　きたぁ♥　コレよコレ♥
ああっやっぱコレ最高お♥」
ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ
ジンと由佳がまぐわる音が体育倉庫内に響く。

「あはっ♥　あはああ♥　ぎもぢよすぎるぅ♥
あ゛あ゛っ♥　あ゛あ゛っ♥」
目隠しした上からでも分かるほどのアヘ顔。

そこで…俺は彼女の目隠しを取ってやった。
「!?‥」
目の前にいたのは、由佳の彼氏だった。

下半身を丸出しにして、座り込みうなだれている。
「な？！　……え？　……どういう……こと？」
驚愕の表情をしている彼女に俺は種明かしをする。
「さっきまでお前を犯していたのは彼だったんだよ。　彼を操ってお前が何を企んでいるか吐かせた後、協力してもらうことにしたんだ」
「≪私はあの男に脅されていて酷い目に合わされている。　証拠を見せるから、明日の5時半に旧校舎裏の体育倉庫まで来て≫行為を目撃した彼氏が暴力で俺を黙らせて『禁』を解除～ついでにこれ以上手出しをさせないようにする……ってシナリオだったのかな？」
「そんな……全部バレて……」



「もう少し冷静な男を選ぶべきだったね。
彼は証拠なんて見ずに、君の発言だけを信じて俺に襲いかかってきた。」

「…羽交い締めにされて
《お前の両腕と両手の指、全部バラバラにしてやる！》
って言われてさ。」

「本当に怖かった。

あの時…ジンが助けてくれなかったら、どうなっていたか分からない」

思い出しても震えがくるあの状況。

あんな目に合わされたせいか、こんな状況になっても
この男に悪いことをしたという気持ちは沸いてこない。

「ねえ違うの…！　聞いて！」
うなだれている彼氏君に必死で弁解しようとする由佳。
俺はそんな彼女を横目にジンにピストンを再開させる。
ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ
「あれはっ…あはあああん♥　ヤってるのが…あん♥
コイツだとぉ…はあああん♥　思ってたからあああんっ♥」
よがりながらの必死の言い訳。

ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ
「いぬのぉっ♥　おちんぽなんかよりぃ♥　あはあああん♥
あなたのチンポのほぅがぁ…あああんっ♥　ずっとよかった
からぁ…♥」

「嘘つけっ！！！　そんなっ…そんな顔で言われても
説得力あるかっ！」
ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ　ずちゅっ
「下手くそだの粗チンだの言いやがって！　お前なんか
犬に発情してよがる変態じゃねえか！」
「そんなことないのっ♥　いぬのおちんぽなんてぇ♥
ぜんぜんっ！　きもちよくないのおっ♥」

由佳が見苦しい言い訳をしている間にジンに限界がくる。

ぐぐぐぐぐぐぐ…びゅっ！
びゅくっびゅくっびゅるるるっ！
「お゙ッ♥　お゙お゙ッ♥　お゙お゙お゙お゙お゙お゙ん゙♥」
『禁』は既に解除してある。

彼女にとって一ヶ月ぶりの絶頂。
ブサイクを通り越して、醜い…とまで言えるほどの
アヘ顔だった。

そんな彼女の本性を目の当たりにして彼氏君は

「気持ちわる…」

とだけ呟いて服を着はじめる。

仮にも彼女と途中までセックスして、その後は全裸の姿を見ていたはずなのだが、今、彼のあそこは小さくしなだれていた。

俺を不能にしようとした彼は、今回のことで自分が不能になってしまうかもしれないな。

ほんの少しだけ少し申し訳ない気持ちになり、由佳にフォローするように促してみる。

「いいのか？　彼、帰っちゃうぞ」
「……いい」
背中に哀愁を漂わせ、体育倉庫から去る彼氏君。
「……今なら追いかければ間に合うぞ？」
「どうせ、この計画のために適当に声かけただけの人
だし……別に……そんなに好きじゃなかったし」
「でも……」

「……いいの……いま……追いかけたら……コレ、抜けちゃう……♥」
……。
俺は心底呆れていた。
彼女はまだジンと繋がったまま。
つまり、チンコブを膣から抜かないと彼を追えないから嫌だ……そう由佳は言っているのだ。
この女は救えない。
自発的に謝るのを期待するのは無理だ。
もうさっさと彼女との関係を精算したくなった俺は、由佳に謝罪の話を切り出した。

外はもう夕方だろう。
体育倉庫内は窓からの光でオレンジ色に染まっている。
「由佳、今までのことを心から謝罪するなら、もうお前を許してやっても良い」
ジンとの結合が解かれた後、マットの上に座り込んでいた彼女に俺はにそう提案する。
由佳は最初、きょとんとしていたが次第に俺が何を言っているか理解できてきたらしい。
俺の顔をちらりとみた後、彼女は…

■「誰が謝ったりするもんか！」と言った
→ED1フォルダへ
■「許してください」と謝ったフリをした
→ED２フォルダへ
■「ごめんなさい」と土下座をして誠心誠意謝った
→ED３フォルダへ

「誰が謝ったりするもんか！」
「私は何も悪くない！　そもそもアンタがキモいのが悪いのよ！　なのにちょっといじめたくらいで何で私が謝らないといけないの！」
「その犬だって生きてるんだからいいじゃない！　私、いま彼氏に振られたところなのよ？！　そんな私に追い打ちして楽しい？　もういいでしょ。　許しなさいよ！」
自分勝手な意見をまくしたてる由佳。
駄目だ。　もう本当にこの女は救いようがない。
「わかった。　もういいよ」
「！　そうよ！　最初からそう言えばよかったのよ！　もう二度と私に話しかけないで！　じゃあね！」
そう告げると彼女は服を着て体育倉庫から出ていった。

数カ月後。
平伏　由佳は生徒会長候補として、体育館の壇上にいた。
彼女自身もなぜ自分が先生から生徒会長候補に選ばれたか分かっていない。
だが友人たちに「すごいじゃん！」とチヤホヤされて悪い気はせず、あれよあれよというまにこの場に立っている。
そう。　全ては俺が仕組んだこと。
本当なら、いじめ常習犯で先生に面倒くさがられている彼女にそんな美味い話があるわけがない。
そうとも知らず、次のスピーチの準備をする由佳。
対立候補の清水さんがスピーチを終え、いよいよ彼女の番だ。
マイクの前へ移動し、大きく息を吸う。

「皆さん。この度、生徒会長に立候補しました、2年◎組の平伏　由佳です。」
「早速ですが皆さん。この学園生活が窮屈だと感じることはありませんか？」
「私はもっと、この学校を自由で生徒主体のものに変えていきたいと思っています」
ギャル風の彼女の外見からは似つかわしくない、しっかりとしたスピーチ。
そのギャップゆえにか、生徒たちは一心に彼女の言葉に耳をかたむける。

「そこで、私の提案する公約は…
学校内での犬とのフリーセックスです！」

「!?」
とんでもない言葉が彼女の口から飛び出し、
困惑する学生たち。

そして、その言葉に呼応するようにステージの
袖から、犬がぞろぞろと彼女の元へ集まってくる。
「きゃあ！」
怯える生徒。
「なっ……⁉」
驚く教師たち。

だが、みな動かない。
いや、動けない。
いまステージ上にいる者は全て俺の操り人形だった。

そうこうしている間に、由佳は全ての服を脱ぎ捨てる。
汚れた体を晒しながら、彼女は…全校生徒の前で犬との
セックスをはじめた。
「ひいいっ！」
「いやああっ！」
「なっ…何が起こってるんだ!?」

「みんな知らないかもしれないけどぉ♥　ああっ…♥
このようにぃ…♥　犬とのセックスは…とても気持ちいいものなんですぅ…♥　ああんっ♥」
「校内でぇ…あんっ♥　いつでも犬とセックスできるようになったらうれしい…ああんっ♥　じゃなくて、生徒のためになると思いますぅ…あああんっ♥」
異様な光景だった。
スピーカーから聞こえてくる、犬と性行為する由佳の艶めかしい声。
なぜか止めに入らない教師たち。
皆、どうしていいか分からずフリーズしている。
そこで俺は…
彼女だけを操るのを止めた。

「ひいっ！　やあっ！　あっ♥　違うんですっこれはっ！はあっ♥　私ほんとうはこんな事っ……！　あっ♥　ああんっ♥」
犬に犯されながら、必死に弁明しようとする由佳。
しかし、あまりの快楽に体勢を保てず、その場に転倒してしまう。

そこに群がるたくさんの犬。
彼女を犯していたドーベルマンもこの穴は
自分のものだと言わんばかりに、仰向けになった彼女のマンコに再度チンポを挿入する。
「ひぃやぁっ♥　ちがうっ…ちがうのぉっ♥」

「やあっ♥　らめっ♥　何も考えられないっ♥
あっ♥　あっ♥　きもちよすぎてっ♥　あっ……くる
……きちゃううううう♥」
手で、口で、マンコで犬たちのチンポをしごきなが
ら、とうとう絶頂する由佳。
「お゛ッ♥　お゛お゛ッ♥　お゛お゛お゛お゛お゛ん゛♥」

びゅくっびゅくっびゅるるるっ！
びゅくっびゅっびゅっびゅくっ！　びゅくっ！びゅっ
びゅっ！
びゅるっ！　びゅくっ！　びゅっ！　びゅっ！びゅっ
びゅっ！びゅっ！びゅっ！
由佳がイくと同時に大量の精液を放出する犬たち。

「あは…♥　あへぁ…♥」
彼女は放心状態のまま、愛おしそうに顔や身体中に犬の精液を塗りたくっている。

そして、精液を出し終わった犬たちはマンコに
結合している犬を除いて壇下へと降り始めた。
「いやっ！　こないでっ　やああああああ！」
一人の女生徒の悲鳴が呼び水となり…

「うわっ！　わああああああ！」
「やだっ！　やだっ！　やあああ！」
みな外へ逃げはじめた。
俺が事前に体育館裏の大扉を全開にしておいたので、
誰も怪我をすることなどなかった……が、この事件は一部始終を録画していた生徒によって、またたく間にSNSに拡散され、マニアの中では伝説に残る事件になった。

検索：平伏　由佳
スマホの画面中が彼女の素顔と犬と交尾しているサムネ画像で埋まる。
検索：yuka hirafuse
海外の違法アップサイトの動画…再生すると、
「あ゛あっ♥　あ゛あっ♥　あ゛あっ♥　あ゛あっ♥」
音質は悪いが、聞き覚えのある汚い喘ぎ声が聞こえてくる。
もうこのデータがネットから消えることはないだろう。
あの時、ちゃんと謝ってくれれば…こんな事にはならなかったのに。
～END～

「許してください」
「もう悪いことはしないし、いじめたりしません。　だから
もう許して」
心からの謝罪ではない。
それは彼女の目を見ればすぐ分かった。
だが由佳との関わりにもう辟易していた俺は、適当に彼女
の謝罪をあしらった。
「わかった。　もういいよ」
俺がそう告げると、彼女は顔を反らし服を着はじめる。
見えないあの顔は、嘘の謝罪で自分を許した間抜けな俺
をあざ笑っているのだろうか。
まあそれでもいい。
もう彼女とは関わりたくない。
俺は服を着て体育倉庫から立ち去る彼女を、無言で見送
った。

夜。

「ワンワン！　ワンワンッ！」

ジンの鳴き声で目を覚ます。

あまり鳴かないジンがこんな必死で鳴くなんてただごとではない。

俺はパジャマに上着だけ羽織ると、慌てて家の外に出た。

ジンの側に駆け寄り、その吠える先を見ると…犬月神社の方向がこんな夜中だというのに明るい。

まさか！

ジンを伴って、神社へ走る。

階段を中腹まで登ると…この明るさの正体が分かった。

犬月神社が…燃えている。
俺は慌てて階段を登り切る。
そこには見慣れたあの女…由佳の姿があった。

手には赤いポリバケツを持っている。
「何をしてるんだ！！」
思わず叫び駆け寄る。

『あら、遅かったのね。　もう神社燃えちゃったよ～』
状況に似つかわしくない軽薄な声で俺に答える由佳。
『この神社のせいでしょ。　あんたが変な力使えるようになったのって』
『もうコレであんたは力を使えな～い。　私に命令することもできな～い。　キャハハハハハｗｗ』
「こんな事をして…どうなるか分かってるのか」
「大丈夫よ。　私、未成年だもん」
「そういう事を言ってるんじゃない…お前はっ…！」

「じゃあ、全部アンタのせいにしちゃおっか。ココに呼び出された私はレイプされそうになって抵抗して、私を押さえつけようとしたアンタはうっかり明かりを倒してそれが神社に引火。」
「気がついた時には手遅れに～ってシナリオでどう？ｗ私には弁護士の父と政治家の母がついていて、アンタの親は平社員とパート。勝負は見えてると思うんだけどｗｗｗ」
「くっ……う……」
こいつどれだけ腐ってるんだ……！
いや今はそんなことはどうでもいい。
早く消防車を呼ばないと！

その時だった。
「え⁉」
「‼」
俺とジン、由佳以外が灰色になる。
うるさいくらいだった火の音は消え、辺りを静寂が支配する。
「なっ…なにがおこったの？」
オロオロする由佳。
これは…犬神様の力…なのか？
「ちょっと⁉　なにしてんのよ！　止めなさいよ、アンタ」
勝手に俺のせいだと決めつけ、掴みかかってくる彼女。

「…ひっ⁉　い、いや…なにこれぇ！」
由佳の手は…犬の手になっていた。
「うそ⁉　うそうそうそうそ！」
怯え慌てふためく彼女。

灰色の空間に何処からともなく声が響く。

「平伏　由佳よ…我は代行者として友に力を与え、汝を更生させようとした。」

「だが、お前の性根は歪みすぎていたようだ。
我が社を焼いた罪…見過ごすわけにはいかぬ。
これからお前は犬として生き、その罰をうけるのだ」

「そんなっ！　許して！　ごめん！　謝るから！」

「もう遅い」

「いや…やぁああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

あれから一年。

俺は燃え落ちてしまった犬月神社を再建するため、休日は駅前で募金を呼びかけた。

≪神社のご利益でジンは老犬なのにこんなに元気です≫という動画をSNSで発信し、クラウドファウンディングを募ったりもした。

そのかいあって、すぐに神社は再建され、現在では県外から愛犬の健康のためにお参りに来る人もいるくらいだ。

由佳のご両親は、今も必死で彼女を探している。
失踪した現場と思しき神社の焼け跡には、由佳の指紋が残ったポリバケツと服が残され、何らかの事件に巻き込まれた可能性が示唆されていた。

俺も立場的に警察に色んなことを聞かれたが、さすがに「由佳なら犬になりました」と言うこともできず上手くごまかした。

その由佳だが…今は我が家の飼い犬になっている。
あのまま、あんなところに彼女を置いておけなかったのだ。

俺は両親を何とか説得して、由佳を飼わせて貰うことにした。

いざ飼い始めてみると、人間のころはあんなに憎らしかった彼女だが、少し足りないところも含めて可愛らしい。

その結果…
由佳はジンの子供を妊娠し、三匹の可愛い赤ちゃんに恵まれた。

一連の活動もあって犬好きのコミュニティと親密にしていたので、里子に出す相手はすぐに決まった。ひとりはあの日、公園で会ったおばちゃんだ。一言多いのが欠点だが、根はすごく良い人だ。
ジンと由佳に子供ができたと知った時も、「あら～ジンちゃん、パパになるのね。 おめでとう～。お嫁さんオシッコするの下手っぴだから、赤ちゃんにはジンちゃんが色々教えてあげてね～」とナチュラルに彼女をディスって睨まれていたけど。まあ、あの人なら間違いなく大事にしてくれるだろう。

子犬と一緒に寝る彼女を見ながら俺は思う。

由佳がこの姿になったのは彼女の罪ゆえだが、あんな行動に走らせてしまったのはある意味、俺の罪とも言える。
その責任として…俺はこれからもずっと彼女の面倒をみていこう。
~END~

「ごめんなさい」
そう言って、彼女は深々と頭を下げた。
「本当に…本当にごめんなさい。最初はいたずらのつもりだったんだけど…どんどん止まらなくなって。」
「ごめん。ほんとうにごめん。ジンも…ごめんね。苦しかったよね。ごめんね。ごめん。ごめん…」
それは飾り気のない、彼女の本心からの謝罪だった。

そして、その言葉に気付かされた。
俺は…彼女にジンに対して謝ってほしかったんだ。
それは俺自身の罪の意識の元でもあった。　俺のことにジンを巻き込んで殺してしまった。　その復讐にもジンを付き合わせてしまった。
彼女が「ごめん」とジンに謝ってくれたおかげで、俺の心のどろりと重かった部分が、綺麗さっぱり消え失せていることに気づく。
もういいだろう。
「平伏さん、顔を上げて。　もういいから」
「でも……」
涙を流したまま土下座のポーズを崩さない彼女の側で、俺はスマホに撮っておいた画像をすべて消す。
「画像や動画は全部消した。　みんなの記憶からも君の恥ずかしい姿は消えてるはずだ。　もう君は自由だよ」

「！」
俺の態度に驚いて顔を上げる由佳。
そんな彼女にバッグから取り出したタオルを渡す。
「悪いけど先に帰るね。そのタオルは捨てていいから。じゃあね、平伏さん」
そう言って、俺はジンと一緒に部屋を出た。

外は既に星あかりが見えるほど暗くなっていった。
夜道を歩きながらジンに話しかける。

「ジン、ごめんね。あの時、守ってやれなくて。こんな復讐に協力させて。でも…もう終わったよ。さあ、うちへ帰ろう」

俺の言葉を聞いて嬉しそうにじゃれ付いてくるジン。

幸せな命の暖かみを感じながら俺たちは帰宅した。

次の日。
俺は帰宅の準備をしていると、由佳に声をかけられる。

「ちょっと…いいかな」

何か落ち着かない感じの彼女。

「？　どうしたの？」

「あの…これ、昨日の…」

由佳が差し出したのは、帰り際に渡したタオルだった。

「捨てて良かったのに」

「いや…なんか悪いな～って思ってて」

照れくさそうに笑う彼女。

どうしたんだろう。
やはり様子がおかしい。

「あの…ごめんね」

また謝ってくる。

「もう謝らなくていいよ。　昨日ので充分だから」

「いや…そうじゃなくってね」

「？」

「…なっちゃったみたい」
「?」
「…好きになっちゃったみたい、アナタのこと」
「え⁉」
はにかみながら照れ笑いする由佳。

「ごめんね。迷惑だったね。でも伝えておきたくて。
それだけ。じゃあね」
そう言って俺に押し付けるようにタオルを渡すと、彼女
は風のように教室を去っていった。

それから…
色々あって、俺と彼女は付き合うことになった。
俺が彼女に告白し返した時、最初は
「でも私…こんな身体だし」
と言って断る素振りを見せていた。
どうやら俺に気持ちだけ伝えて恋人になろうと
しなかったのはその引け目があったからのようだ。
だが、そのことに関しては俺にも責任がある。

俺はそんなこと気にしない、付き合って欲しい…と由佳に告げると、彼女は涙を流して告白をOKした。
その後の嬉しそうな笑顔は今でも忘れられない。
クラスのみんなは以前までのことを知っていたので、俺たちが付き合うということに驚いていた。
だが、いじめられていた俺が《彼女のあの態度は好意の裏返しだった》と言い続けていると皆それで納得したようだ。
今では学年一の美女のハートを射止めた男として、男子生徒に羨ましがられている。

しかし…

そんな順風満帆な二人の間に、解決できないひとつの問題が。

「あっ！　あっ！　ああっ！　はああああっ♥」

「もう…また？」

家の裏手から聞こえる由佳の喘ぎ声。

「今日は期末の勉強、一緒にやるって言ったよね？」

「あぁっ……ごめんなさい！　お家に上る前に、ジンに挨拶しようと思ってぇ……♥」
いつもこうである。
彼女は俺の家に来るたび、ジンとの交尾に興じてしまうのだ。
……もうこうなっては由佳は俺とジン、どっちの恋人かわからないな。
そんな考えが頭をよぎる。

「あのっ…ごめんね！　こっち！　こっちの穴なら空いてるからぁ♥　ああんっ♥」
ジンにマンコをハメてもらいながら、空いている尻穴に俺のチンポを入れて欲しそうにおねだりする由佳。
まあ彼女をこうしてしまったのも俺だし、仕方ないか。

そうして今日も…
二人＋一匹は背徳的な行為に興じるのだった。
～END～

犬神之力 壱

探

犬神之力 弐

淫

犬神之力 叁

禁